

日本ロレンス協会 第 56 回大会報告

2025 年 6 月 21 日（土）、22 日（日）於 國學院大學

今年度は國學院大學での開催となりました。晴天のもと緑陰美しい渋谷キャンパスで、日本ロレンス協会の研究発表に加えて日本オーウェル協会と日本ロレンス協会の合同シンポジウムが行われました。2 日間にわたり充実したプログラムが展開され、活気に満ちた有意義な大会となりました。



【大会 1 日目】

総司会の國學院大學の上石田麗子氏の進行のもと、日本ロレンス協会第 56 回大会は石原浩澄会長の「開会の辞」で幕を開けました。



研究発表

二つの研究発表がありました。

- ① まず成蹊大学大学院生の菅田泰平氏が発表されました。タイトルは「*Miriam as Medium: Sons and Lovers*における色彩の修辞学」、司会は大阪経済大学の福田圭三氏でした。



- ②次は鳥飼真人氏（高知県立大学）のご発表「『虹』を架ける一ロレンスはどのように形而上学を動かすか」です。司会は木下誠氏（成城大学）がつとめられました。



シンポジウム 1

<日本オーウェル協会・日本ロレンス協会 合同シンポジウム>

オーウェル、ロレンスと政治

司会の高村蜂生氏の、本シンポジウムでは第2次トランプ政権発足後の世界の急速な右傾化への流れ、国際主義から国家主義への急激な変転などの現状下、オーウェル協会とロレンス協会が政治性をどのように読んでいくかを検討したいという主旨説明から始まりました。



3名の講師による洞察に富み、新規性が高い発表を受けて、白熱した質疑応答が行われたシンポジウムとなりました。

- ① 「ジョージ・オーウェル『空気を求めて』と D.H.ロレンスの小説一階級問題と共産主義」
講師 近藤直樹氏（日本大学教授）



② 「D.H.ロレンスとジョージ・オーウェル—政治といふ営みに対する態度」

講師 大江公樹氏（早稲田大学非常勤講師）



③ 「トランプ時代にジョージ・オーウェルとジェイソン・スタンリーのファシズム論を併読する」講師 高村蜂生氏（関西学院大学教授）



総会



総会では、新体制および次年度の大会について話し合われ、会計報告が行われました。また、日本オーウェル協会会長の福西由実子氏より両協会のさらなる親交を願うご挨拶をいただきました

懇親会 國學院大學メモリアルレストラン



日本オーウェル協会の（前列左から）渡辺愛子氏、福西由実子氏、村石恵照氏、前津朋子氏、後列近藤直樹氏（石原会長の右）との記念写真です。



任期満了となり退任される石原会長からのご挨拶です。石原会長はコロナ禍でのオンライン開催から今回の大会に至るまでの4年間、大変な時期に舵取りをし難局を乗り越られました。感謝をこめて会員から石原会長に盛大な拍手が送られました。



【大会2日目】

シンポジウム 2

E.M.フォースターと D.H.ロレンス

司会を加藤彩雪氏がつとめ、一見対照的な作家に見えるフォースターとロレンスのテキストが実は本質的に深く響き合っていると考え、両者が「共通項を持っていたのではないか」という問いに対して3人の報告者が異なる独自の観点から両作家に対峙するという、ダイナミックなアプローチと緻密な精読が際立つ刺激的なシンポジウムでした。



- ① 「フォースターとロレンスの創作上の一致—意識の終末世界に視える女性の表象について」
大山美代氏（近畿大学講師）



② 「E.M.フォースタのゲイ・ナラティブと D.H.ロレンス」

田島健太郎氏（九州工業大学講師）



③ 「E.M.フォースターとモダニズムの展開における位置—“the old stable ego”の先にあるもの」

加藤彩雪氏（大妻女子大学准教授）



コメンテーター 田中雅子氏（九州共立大学講師）



フォースターを中心にご研究なさってきた田中氏より示唆に富むコメントや質問をいただきました。



フロアからも多くの質問が寄せられ、活発な議論と熱心な質疑応答が展開されました。

閉会の辞 副会長 木下誠氏（成城大学教授）

木下誠氏の「閉会の辞」にて日本ロレンス協会第56回大会が閉幕となりました。



* * *

受付は開催校の國學院大學の上石田麗子開催校委員とスタッフの皆様にご協力いただき、運営は石原浩澄（会長）、木下誠（事務局長/副会長）、高田英和（編集委員長）、鳥飼真人（評議員）、井出達郎（会計）、上石田麗子（庶務）、井上麻未（広報）が取り仕切りしました。



以上、第56回大会は滞りなく2日間の日程を終え、盛会裏に幕を閉じました。皆さま、本当にありがとうございました。第57回大会は2026年6月に開催予定です。皆さまとの再会を楽しみにしています。